月桃

西原町立西原中学校三年 玉城 愛麗

あの懐かしい匂いを辿ると

そこには いつもと変わらない月桃

なんとなくずっとあるように感じるけど

六月二十三日を待たず 散ってしまった月桃

さわやかな南風が吹くはずの うりずん

あの日吹いてきたのは

さわやかさなんて微塵もない

物が爆破した時の熱と 黒々とした煙

人の血の匂いだったんだと

知ってる人は

考える人は

今はもう ほとんどいない

戦後に生きる私達は 本当の戦争を知らない

記憶の風化は止められない

そんな時代 するべきことは

しなきゃいけないことは…

『学びたい』

あの残酷な争いで

どれだけの人が傷つき 苦しんだかと

どれだけの人が大切な人を思い

涙を流したかと

どれだけの人が今も平和を願い

祈っているかと

同じ人間なのに武器を持ち 争いあうことが

どれほどみにくいことなのかと

私達は 学ばなければいけない

あの過ちは くり返してはいけな

忘れそうになっても

きつと 月桃が思い出させてくれる

月桃は あの日の象徴だから

そしていつか 本当の平和が訪れた時
月桃は さわやかな南風に香りをのせて
私達と共にいるだろう

月桃の花言葉は
さわやかな愛 だから